

# 保健学科だより

徳島大学医学部

School of Health Sciences, The University of Tokushima

第14号 2014年6月

## 巻頭言

徳島大学医学部保健学科長  
近藤和也

徳島大学医学部保健学科は、看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻の3専攻からなっており、開学以来今年で13年目になります。将来、看護師、保健師、養護教諭、診療放射線技師、臨床検査技師を目指す方が、国家試験受験資格や免許状授与の所要資格を得ることができます。国家試験の合格率は、開学以降全国平均に比べて高い水準を維持しています（看護師：97-100%、保健師：87-96%、診療放射線技師：87-97%、臨床検査技師：91-100%）。卒業後就職を希望する学生は、100%就職することができ、全国で活躍しています。さらに、7年前に大学院博士前期課程が、5年前に大学院博士後期課程が設置され、四国地区の国立大学で唯一、看護学、放射線技術科学、検査技術科学の学部から大学院博士課程まで一貫した教育体制が整っています。

保健学科および保健科学教育部(大学院)のミッションとして、①医療系3学部(医学部、歯学部、薬学部)5教育部(医科学、栄養生命科学、保健科学、口腔科学、薬科学)を有する環境を活かし、倫理観や実践力のあるチーム医療、地域医療、国際医療に貢献できる医療人及び研究者を育成する、②大学院では高度な実践力や研究能力を育成し、地方大学等の看護・医療技術系教育を担う教員の充実に貢献するとともに、がん看護専門看護師や放射線治療専門診療放射線技師、医学物理士、超音波検査士等の高度専門職医療人の育成を推進する、③学部・研究分野の枠を超えた教育研究活動を行い、複合的な視点で医療・保健を評価・分析・理解する能力を有する若手研究者を含む幅広い研究者を育成する。子どもの心の問題の発症予防や電子看護管理システム等をはじめとする、他の医療系分野や人文・理工系分野との連携を活かした

研究や地域貢献を推進する、の3項目を掲げ、遂行しています。さらに、国際交流にも力を入れ、フロリダ・アトランティック大学 (FAU, 米国)、テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター (米国)、ヘルシンキメトロポリア応用科学大学 (フィンランド) と学術交流協定を締結し、毎年学生が交流しています。今年9月よりロクシン教授 (現在FAUの教授) が看護技術学分野の教授として着任される予定であり、ロクシン教授を中心に、さらに積極的に国際交流を推進し、国際的視野から保健医療を担うことができる医療人を養成していきます。

これからも教職員と学生が共に協力しながら、保健学科の発展を目指してまいりますので、関係各位のご支援をよろしくお願ひします。

## 目次

巻頭言	page:1
特集	2
研究紹介	4
1. 超音波乳腺画像を用いた新たな母乳育児支援に関する研究	
2. p53を標的とする新規放射線防護剤の開発	
3. 慢性腎臓病 (CKD)	
教務委員会だより	6
学生委員会だより	7
新任教員紹介	7
国家試験合格状況	8
インフォメーション	8

## ■ 徳島大学 福島住民地域支援型プロジェクト 「ふくしま・とくしま ともに歩もう」の紹介

放射線技術科学専攻  
阪 間 稔

本学独自の住民復興支援プロジェクト「ふくしま・とくしま ともに歩もう」の発足時には、震災後半年が経過し、大学等機関において中長期的な支援の新たな形が必要であると検討され、その緊急性を考慮し、平成23年10月に中山信太郎教授（総合科学部）を中心に、復興支援協力者6名（発足時、現在12名）の体制で発足し、平成23年度途中からの学長裁量パイロット事業（社会貢献支援事業）に採択された。その翌年以降には、平成24、25年度の環境省原子力災害影響調査等事業「自治体と研究機関で進める効果的な放射線教育活動の模索と効果の検討」と平成24、25、26年度の学長裁量パイロット事業（継続）への申請・採択に続く。ここで、各年度ごとの具体的な活動や実績報告を一覧に示す。

### 【平成23年度後期～平成24年度】

- ・福島県白河市と震災復興に向けた連携・協力に関する協定締結（香川学長・鈴木白河市長）平成24年5月10日
- ・福島県災害対策本部主催の放射線・除染講習会への講師参加及び、講習会で使用されるテキストの作成及び監修
- ・福島県の特定避難勧奨地区（伊達市）や復興支援協定締結自治体（白河市）での放射能汚染調査（土壌、河川水、農作物など）
- ・放射線学習会の実施（白河市の小・中学校における小中学生、保護者、教員を対象、15回程度実施し、参加人数は約1600名）、放射線Q & A資料の作成配布、大学院生による講義は小・中学生やその教職員に高評
- ・福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター」への放射線測定における技術支援（伊達市）
- ・住民・自治体を含め誰もが簡便に農作物などの放射能濃度を現地（フィールド）で測定・判定することができる可搬式放射能濃度測定の簡易ベクレルモニターの開発
- ・白河市健康増進課への放射線アドバイザー協力と白河市民への個別放射線相談
- ・第3回徳島大学・JST共同研究発表会「原子力災害と向き合う研究者」研究成果報告会
- ・現在も継続している「しらかわ・とくしま便り」の発行、白河市広報による住民への配布とweb公開  
(<http://www.city.shirakawa.fukushima.jp/view.rbz?of=1&ik=0&pnp=14&cd=3988#nourin>)

### 【平成25年度】

- ・福島県内同地域での系統的な放射能汚染調査（土壌、河川水、農作物など）
- ・放射線学習会の充実を図り「放射線なんでも相談会」を企画し、住民と講師がほぼ一対一の状況のもと、住民からの放射線に関する不安や質問について対応、特に、個別に強く個人住宅の放射能汚染について調査を希望される住宅への放射能汚染調査とその説明、とにかく放射線への不安・不信感への払拭に専念
- ・白河市子ども課との連携支援の拡充を図り、小・中学生だけでなく、幼稚園・保育園に出向いての放射線教育会の実施、さらに講義だけでなく簡単な理科実験の実施
- ・住民の放射線への不安感から屋外での遊び・運動に制約を受けている子供たちへの運動実習（小原繁教授・総合科学部）や、アンケートにより聞き取り調査分析による臨床心理学者（山本真由美教授・総合科学部）の支援活動
- ・復興支援協力者メンバー及び支援活動に尽力した本学学生2名（うち1名は、保健科学教育部大学院生）に、白河市より復興アドバイザーならびにアソシエイトの委嘱（自治体からの学生へのアソシエイト委嘱は全国初の事例）
- ・絵本作家及び環境省除染情報プラザと連携し、幼児から小中学生の学年に応じたプレゼンテーション資料、電子紙芝居の作成
- ・本学香川学長を福島県白河市に招いての「徳島大学と白河市による放射線対策事業報告会」の実施、（平成26年3月22日、白河市立図書館地域交流会議室）
- ・徳島県内でのオンリーワンとくしま学講座「原子力災害と放射線について正しく学ぶ」の講師や身近な学童施設での放射線教育（電子紙芝居の利用）

以上のように、これまでの活動の主だったところを挙げてみたが、各々の復興支援協力者メンバー（本学内外教員で様々な分野の専門家、さらに大学院生・学部学生を含む。）がそれぞれの形で住民支援活動を行っているので、私の周知外で

多々、ご尽力されていると思われる。そのため、この一覧に挙げたものだけが本プロジェクト活動の全実績や全活動内容ではないことを補足する。

ここで平成24年5月10日の徳島大学と白河市の間における「震災復興に向けた連携・協力に関する協定」の締結に関して、他の自治体と大学全体による原子力災害支援の連携協定における全国の大学の中でも、筑波大学・いわき市（平成23年8月10日）、弘前大学・浪江町（平成23年9月29日）、東京大学・南相馬市（平成23年9月30日）に次いで、4番目の事例であり、特に自治体の放射線対策部局だけでなく、教育（幼児・保育から小中学生、ならびに教職員まで）及び健康関係の各課と連携して、小規模ながら現地要望対応型の支援を行うスタイルを早期に実現した大学・自治体連携モデルケースとして、福島県内外で注視されるまでに至っている。

これまでの住民支援活動を継続的に現地に赴いて行って行く中で、本支援活動の前半期（平成23、24年度）では、主なメンバーが放射線や放射線防護の専門家であったので、現地での放射能汚染調査や放射能濃度分析のための試料サンプリング（土壌や河川水、農作物、植物）を積極的に行い、専門的かつ科学的な見地から測定データを分析し、住民への放射線学習会などでその結果を直接、住民の方に示し説明することで、放射線について正しく理解してもらえるとやや安易に考えてしまっていた。しかしながら、そのような科学的な説明だけでは非常に不十分であり、データの捉え方によってはさらなる不安を抱きかねない状況にこれまで何度か遭遇し、徳島への帰路途中で何度も悔やまれる思いと反省しなければと自らを責めました。それを受けて何度か活動メンバー、特に中山先生と議論を重ねて、住民や教職員に対して最善最良の支援活動形態を模索しつつ、後半期（平成25年度）では、その一つの形態として、しっかりと住民の意向に寄り添った（不安感を解消するための）放射能汚染状況調査を自治体（白河市役所放射線対策課）と協同し行うこと、すなわち、

個人住宅周辺の特別放射能汚染調査の実施やその調査結果の詳細な説明、納得するまでの質疑応答を行うなど、決して効率的な支援活動と言えないが、とにかく色々試してみた。私としても印象深かったことに、個人住宅調査を希望された住民の方は、「放射線なんでも相談会」に初めて出席され、質疑応答の際に支援メンバーを前にして、今回の原子力災害について、厳しい憤りの言葉や罵倒を長時間浴びせられてしまった。しかしこの時、しっかりとその怒りを受け止め、真摯に寄り添うことに努めたおかげで、今では強い信頼関係を構築することができ、白河市役所放射線対策課から大きな感謝の意を受けるに至った。さらにまた、教職員への放射線学習会アンケート結果から見えてくる心理・運動面でのケアの必要性や、自ら放射線の正確な知識を獲得しようとする意識の脆弱性など、このような課題解決に対して放射線の専門家からの側面では補いきれない状況もあった。その時には、新たに復興支援メンバーとして放射線専門以外の臨床心理学や運動学などの専門家による存在が大きく、救われた感があった。

最後に、今年3月22日の報告会において白河市長・鈴木和夫氏からの「復興に向かって進む被災地に吹く大きな逆風、それが風化と風評被害です。」と話されていた。このような時期だからこそ、被災地住民はもとより、被災地以外の全国民が放射線の知識を正しく理解することが非常に重要であると考え。特に、福島から遠く離れているここ徳島において、このような住民地域支援型プロジェクトを理解してもらおうとともに、離れているからこそ風化させず、現地に向向いて被災地住民の思いを肌で感じることで、それが一人一人ができる復興支援の一步であると考え。このことは、今年1月11日に、本学蔵本キャンパスで開催された、NPO法人ゲノム徳島第10回公開講演会「福島の森・土・水をきれいにする」で講演された児玉龍彦教授（東京大学）も同様な考えを本学学生の質疑に対して述べられていた。



図1 大学院生による小学生向け放射線勉強会の様子



図2 平成26年3月22日、福島県白河市で開催された放射線対策事業報告会にて登壇する本学学長 香川征学長



図3 福島県飯館村長泥検問所付近での試料サンプリングと空間線量率測定の様子



図4 幼稚園・保育園、小学生低学年向けの電子紙芝居一例。(原作：秋津裕氏、製本：原子力安全システム研究所、平成25年3月発行)

## 特集 2

### ■ 保健学科のグローバル化

教育・研究委員会委員長 看護学専攻  
谷岡 哲也

今年からはアメリカ人の常勤教授、ロザーノ・ロクシン博士が看護学専攻に加わります。

医学部ではグローバル化が迅速かつ大胆に進められており、保健学科および保健科学教育部においても、英語学習や海外留学を重点化し、海外での免許取得に挑戦すると共にグローバルな視野で将来リーダーシップのとれる医療職および教育・研究者を育成していきます。

ロクシン博士は、1976年フィリピン、シリマン大学看護学部卒、1978年同大学大学院修士課程修了、1988年フィリピン大学大学院博士課程修了(看護学博士)、アメリカの病院で看護師として勤務後、1991年からアメリカ、フロリダアトランティック大学看護学部准教授を経て、同大学教授となっています。代表的著書には、『現代の看護におけるケアリングとしての技術力—実践のためのモデル』、Rozzano C. Locsin 著、ふくろう出版、第

2版2013年があります。

看護師の教育、研究、実践体制は、アメリカが最もすすんでいます。特に、高度専門看護師の育成については、1970年代以降の歴史があります。そのようなアメリカにおいて、ロクシン博士は、専門分野において特にすぐれた業績と先導的な役割を果たしている教員に対して付与される distinguished professor (教授より上位の名譽的な称号) を得ています。また、アメリカにおける看護の教育・管理・実践・研究者のリーダーである米国看護アカデミー (American Academy of Nursing) の2,068人のフェローです。



Prof. Rozzano C. Locsin

看護の国際ジャーナルの査読委員や編集長も歴任しており、今後は英語論文作成の推進、国際学会参加の促進、海外の大学や研究所などとの連携を促進することが可能になります。また、量的および質的研究を組み合わせた研究手法に長年取り組んでおり、このような研究指導が可能です。グローバル化に向けて、大きな力を発揮することになるでしょう。

## 研究紹介

### 1. 超音波乳腺画像を用いた新たな母乳育児支援に関する研究

看護学専攻  
葉久 真理

助産学では、母子の安全・快適・満足をキーワードに、質的・量的手法を用いて研究を行っています。平成24年4月から、助産教育を大学院2年間での教育に移行し、今春11名の修了生を送り出しました。11名それぞれが、助産を取り巻く問題や課題をテーマに、妊産褥婦、夫や実母、助産師・

看護師・看護師長そして思春期ピアカウンセラーなどを対象に調査を行い、学位論文を仕上げました。助産の新たな知見が集積されていくことを楽しみにしています。

さて、今回紹介する研究（科学研究費補助金基盤(c)）は、母乳育児が推進される中、どう頑張っても十分な母乳分泌が望めない事例が母乳育児の失敗感や育児困難感を体験し、ひいては産後のうつ状態に陥ることを防ぐための支援を見出すことを目的としたものです。母乳育児継続の阻害要因は多数ありますが、乳腺の状態（乳腺の厚さや広がりなど）から母乳育児継続が予測できないだろ

うかという研究に長年取り組んできました。乳腺の厚さでは、わずか2mmの違いで統計的には有意差が出ましたが、事例を重ねるにつれ、乳腺の厚さだけでは母乳育児継続が予測できないことが明らかとなりました。一方、乳腺の広がりという視点で乳腺画像を見ると、産褥期に乳腺組織が広く均一に広がっている所見に対して、浅く不明瞭な事例では産後1か月での母乳のみでの児の成長は十分でない傾向が認められています。このような母親に母乳育児がすべてであるような重圧をかけることがないように、新たな支援を見出したいと考えています。



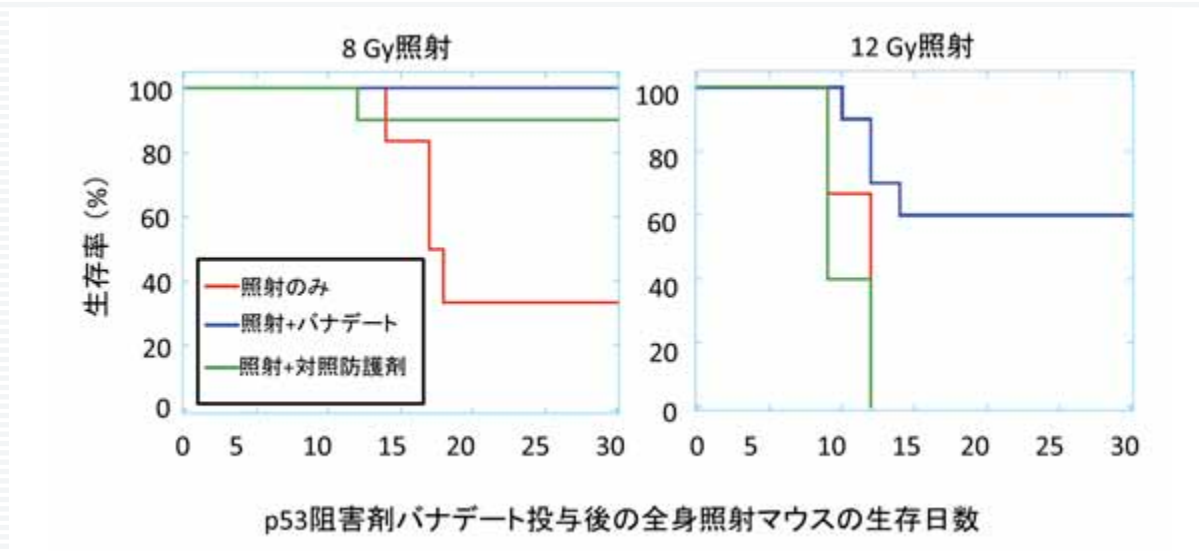
## 2. p53を標的とする新規放射線防護剤の開発

放射線技術科学専攻  
森田 明典

放射線誘発アポトーシスは、多細胞生物が獲得した放射線応答機構の一つであり、私のこれまでの研究のメインテーマです。放射線によるDNA損傷が誘導するアポトーシスの意義としては、損傷後の細胞周期停止や損傷を修復しきれない細胞の除去機構として説明されることが多いものの、修復能だけでは細胞の分化度や組織の違いによるアポトーシス感受性の違いを説明することはできません。特に血球系の細胞や幹細胞、生殖細胞など、生体あるいは子孫を維持する上で将来に渡って有害な影響を及ぼす可能性の高い細胞ほど、アポトーシスによる排除機構が働きやすい傾向にあります。

しかしながら、この速やかな排除機構は、本来生き残っても有害にはならない修復可能な細胞すらアポトーシスによって取り除いてしまい、生体の生命活動に支障を与えかねないリスクの高いシステムです。アポトーシス制御による放射線防護の狙いはこのような「過度の細胞死」を抑制することにあります。

近年、放射線感受性を修飾する因子の研究と、それらを制御する化合物の開発が進みつつあり、その中でもp53は重要な標的分子の一つと考えられています。開発された新規放射線防護剤には、直接的、間接的にp53活性を抑制する化合物が多く報告されています。私たちが取り組んでいるp53阻害剤は、放射線被ばく事故での救命への応用だけでなく、多くのがん細胞ではp53が変異または欠損しているため、がん治療における正常組織選択的な副作用軽減剤としても期待されています。



### 3. 慢性腎臓病 (CKD)

検査技術科学専攻  
櫻井明子

世界的に慢性腎臓病 (CKD) の患者数は増加しており、その末期像である慢性腎不全は大きな問題となっています。慢性腎臓病の主たる原因は糖尿病性腎症であり、我が国では末期腎不全の45%を占めています。慢性腎臓病の予後は極めて不良です。治療の面でも、現行の治療では腎不全や透析になるのを少し遅らせるだけであり、進行する腎症を画的に治癒させる治療法はありません。

腎臓は、生理学的刺激や高血圧・代謝異常のような病的状態に応じて腎臓の各種細胞は遺伝子発

現を変えて、急激な変化に反応しています。糸球体毛細血管の外側にあり糸球体基底膜上にある特殊な上皮細胞であるポドサイトは増殖することができず、恒常性を維持するために精巧な分子機構を保持しています。しかし、ポドサイトの恒常性維持に何が必要かはまだ明らかになっておらず、恒常性を維持する機構を明らかにするために、培養ポドサイトの解析を行っています。グルコース刺激によりポドサイト特有な分子の増減をいくつか確認できました。今後、さらに解析を行い腎臓病の早期診断・治療に役立つバイオマーカーの樹立を目標に研究を行っていく予定です。

## 教務委員会だより

教務委員長  
香川典子

### 新入生にリーフレット「徳島大学医学部生のきみの未来へ」作成

保健学科では在学中に取得できる免許や資格のほか、大学院で専門性をみがき、世界にはばたく医療人養成の様々なコースが用意されています。本学に入学された皆さんに学部学生の中から将来を見据えて学修の計画を立てられるよう、今年度はリーフレット「徳島大学医学部生のきみの未来へ」を作成しました。

このリーフレットでは、将来像を描くきっかけを、特に見える形で行いました。医学部の3学科別の、さらに保健学科の3専攻別に異なるリーフレットとして、色も看護学専攻はピンク色、放射線技術科学専攻は紫色、検査技術科学専攻は緑色を基調としました。サブタイトルにそれぞれ、「看護師」その先へ、「診療放射線技師」プラス、「臨床検査技師」カケルと意味深い言葉が並んでいます。看護学専攻に入学した皆さんには、看護師だけでなく保健師、助産師、専門看護師、養護教諭など人に寄り添う看護職活動のフィールドは無限にあります。放射線技術科学専攻に入学した皆さんは、優秀な診療放射線技師として活躍に加えて、医療情報技師、医学物理士、核医学専門技師など高度な専門性を身につけて、広い世界で活躍できる人材育成プログラムが用意されています。検査技術科学専攻の皆さんは、めざましい臨床検査のニーズに対応できる臨床検査技師として医療機関等で活躍がありますが、健康食品管理士、遺

伝子分析科学認定士、超音波検査士など専門性を活かし、世界をかける仕事をする高度専門職医療人・教育研究者育成プログラムが用意されています。“その先へ”“プラス”“カケル”の言葉には、それぞれこのような意味が込められています。

このリーフレットは教員がアイデアを出して、パンフレットデザインを専門業者に依頼しましたので、カラフルで図を多用するなど、新入生の皆さんにわかりやすい、親しみのわくリーフレットとなっています。早い時期にこのリーフレットを手にとって、将来像を描き、学修の計画を立てて有意義な学生生活となるように期待しています。

### 学生との懇談会を開催

学生の皆さんの率直な意見を保健学科の教育に反映させたいとの目的で、各専攻、各学年の学生の代表と教務委員の先生方とによる懇談会を昨年2回行いました。もっとも5月に開催された第1回は、どちらかというと出席者の顔合わせ的な意味合いが強かったのですが、第2回は、教育の質向上や教育環境改善などについて、たくさんの意見を聞くことができました。予定の時間を過ぎて、なお、学生同士での話し合いが続くなど、徳島大学医学部保健学科で学ぶ学生として、我々教務委員とは違った視点での大学教育への思いを皆さんが持っていることがわかりました。今年度も2回程度懇談会を開催する予定です。昨年からは始まった懇談会なので、手探り的な部分もありますが、若い皆さんの新鮮な意見を聞かせてください。

## 学生委員会だより

学生委員長  
岸田 佐智

～大学生活をより豊かにするために～

今年から保健学科学生委員会委員長を拝命致しました。学生委員とは、学生生活を円滑に行うため、課外活動や学生自治、進路・就職活動、健康管理や経済的支援等、学生生活全般に関して支援することであると規定されています。

では、大学生活を円滑、豊かにするために必要なこととは何だろうと自問自答してみました。新入生たちは、大学生活に少しは慣れてきたでしょうか？そして在學生は、大学生活を満喫していますか？学生と面接をしていると、学生の本分は学業ですが、本業以外のところで満喫している学生たちも多くいるように思います。大学は、高等学校と異なり厳しい校則や教員の目は少なくなり、また大学に合格するまでと、受験勉強に勤しんだ日々からは解放されます。様々なやりたいことを我慢してきたことを、大学合格を契機に、爆発し、自由を感じているのではないのでしょうか？しかし、全てが自分の思うように行動・活動することができるわけではありません。自由に活動できるということは、反面その行動に責任・義務が生じます。自分のやりたいことが、やりたいようにできる一方で、自分自身でそのことを決定し、自分で行動していく必要があります。自由の中には、自己の責任や義務が同時に存在することを忘れてはなりません。

中には、そうした生活を楽しんでいる中で、新たな環境に十分になじめていない学生もいるのではないのでしょうか。5月病という言葉が、あまり使用されなくなりましたが、この時期、大学への合格が夢だった学生にとって、次の目標の設定が困難となり、適応が困難になるときもあります。自分が描いてきた夢とのギャップに悩む時期とも言

えるでしょう。

こうした状況を跳ね返す、心の強さや柔軟さを“レジリエンス”という言葉で、表現することができます。この概念は、先日NHKのクローズアップ現代においても、取り上げられ、現代におけるレジリエンスの重要性を述べていました。危機的状況という、新しい環境にうまく適応できるためには、自分の置かれている状況を客観的、適切に把握する力や、他者への助けを求めることができる力、対処方法の広さが影響すると言われていました。レジリエンスの高い人は、困難な状況にもめげずに、諦めないこと、自分自身を信じること、状況を楽観視できることなど、そして何より、その状況を助けてくれる人の存在が必要です。さて、皆さんは、困難な状況においても、めげずにそれを乗り越えていく力をお持ちでしょうか？

医療の専門職としての学習を求められている保健学科では、学業においても多くの困難やストレスな状況に遭遇します、そうした困難な状況に対して、常にめげずに、乗り越えていく力を養ってください。この困難を乗り越えることで、人として少しずつ成長していくことができると信じております。

学生委員会は、そうした皆さんの目標のための大学時代の生活を支えていくものであると思っています。



## 新任教員紹介



看護学専攻  
地域看護学分野  
教授  
岩本 里織  
Saori Iwamoto



看護学専攻  
療養回復ケア看護学分野  
助教  
日坂 ゆかり  
Yukari Hisaka



看護学専攻  
学校保健学分野  
講師  
大坂 京子  
Kyoko Osaka



看護学専攻  
女性の健康支援看護学分野  
助教  
福岡 美和  
Miwa Fukuoka



放射線技術科学専攻  
医用画像情報科学分野  
助教  
金澤 裕樹  
Yuki Kanazawa

## 国家試験合格状況

国家試験	看護師	保健師	助産師	診療放射線技師	臨床検査技師
徳島大学	97.4%	94.2%	100%	94.7%	100%
全国	95.2%	88.8%	97.6%	89.9%	94.3%

注1) 表中の数値は合格率を示しています。

2) 徳島大学の合格率は平成25年度卒業生・修了生を対象としています。

## インフォメーション

オープンキャンパス 平成26年8月8日(金) 午後(全専攻)

大学説明会を実施します。

3年次編入学試験 平成26年9月20日(土) 実施

保健学科3年次編入生についての募集要項等の詳細については、以下までお問い合わせください。

〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15

徳島大学医歯薬事務部学務課 第二教務係 Tel 088-633-9009



オープンキャンパス

オープンキャンパスと入学試験の最新情報は

<http://www.tokushima-u.ac.jp/med/admission> をご覧ください。

徳島大学医学部保健学科だより 第14号  
平成26年6月発行

発行：徳島大学医学部保健学科  
編集：広報委員会 大塚 秀樹, 片岡 三佳, 千葉 進一,  
井村 裕吉, 西田 敏信, 安藝 健作

保健学科だよりへのご意見・ご要望は、以下までお願いします。  
〒770-8503  
徳島市蔵本町3丁目18-15 徳島大学医歯薬事務部総務課総務係  
電子メールアドレス：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp  
保健学科ウェブ情報リンクページURL：  
<http://portal2.medsci.tokushima-u.ac.jp/Plone>